グループの効果性と下位集団の役割
～Bionによる「特殊作動グループ」に関する実験的研究～

井　上　　操

Ⅰ　問題

本研究はBionの集団理論に基づく実験的研究であり、その理論の中でも「特殊作動グループ」という概念に焦点を当て、「特殊作動グループ」がグループにおいてどういう機能を果たすのかについての臨床的な仮説を、実験的に検証する事を目的としている。

集団研究はレヴィン（Lewin,K.）を始め、多くの学者達によって研究されてきており、その中でも、グループの効果性についての研究も多くなされている。その中でも、本研究で取り上げるBionの集団研究の他に、Balesの集団研究も代表的な研究の一つと言えるであろう。

まず始めに、本研究で取り上げるBionの集団研究を述べる前に、Balesの集団研究について簡単に紹介し、本研究との相違点を述べることにしたい。

集団研究に関する代表的な研究者の一人として、Bales,R.F.が挙げられる。Balesの最も基本的な考えは、集団活動を問題解決の活動として、課題関係あるいは「道具的」行動（instrumental behavor）と社会情緒的あるいは「表出的」行動（socio-emotional or expressive behavior）の区別である(R.ブラウン.,1993.,p,38)。つまり、作業を意識した行動と感情的行動は別である、ということである。そして第二の側面は、集団は平衡へ向かう自然の傾向を持っているという仮設である（Bales,1953)。つまり、作業を意識した行動と感情的行動をバランスを保ってできるということである。そして、問題解決の過程においてBalesとF.L.Strodbeck（1951）は、「方向づけ」、「評

価」、「コントロール」というぐあいに、討議の重点が移動し、それに応じて、肯定的な社会的情緒的反応も、否定的な社会的情緒的反応も増加してくるという。これは、言い換えれば、集団決定を必要とする討議集団にあっては、「方向づけ」を強調する段階から、「評価」を強調する段階に移り、最後に「コントロール」を強調する段階という三つの位相（phase）を経過して、集団決定に至るということであり、この三つへと位相が変化する間に出てくる、否定的な社会情緒的反応と肯定的な社会情緒的反応をバランスを保って、集団は平静な状態になるということである。

以上はBalesの基本的な考えであるが、本研究と最も関わりの深いBionの集団理論との相違は、目に見える範囲を扱うか、目に見えないものを扱うかである。Balesは、集団内の観察できる現象を段階的に説明しており、又、集団内は「道具的」行動か、或いは、「表出的」行動のどちらか一方しか現れず、同時には存在しないと述べている。

一方Bionは、集団内に起こる目に見えない部分で働く現象を扱っており、後に述べる作動グループ（道具的行動）と基底的想定グループ（情緒的行動）は、常に共存していると述べている。以上はBalesの集団理論の概略であるが、本研究では集団内の目に見えない現象を扱うため、以下にBionの基本的な概念について簡単に紹介する。

Bionによれば、グループには二つの機能があるという。それは、「作動グループ」として機能するか、「基底的想定グループ」として機能するかである。

「作動グループ」とは、本質、大きさ、構成、構造、目的に関わらず、あらゆるグループにはメンバー達がそのために集まった基本的な作業があり、その作業が遂行されるためには、メンバー達がそれぞれの能力に応じた協力が不可欠になる。さらに、作業を従事するグループに不可欠なもう一つの特徴は、合理的且つ、科学的方法を用いることによって、現実に接触しているということであり、作業の現実的な側面としての「時間」と

「発達」は、グループ活動において重要な意味を持つのである。

一方、「基底的想定グループ」とは、ある程度一定の情動状態によって作業を実行することを妨げる機能を持つ。そのため、グループはこの想定が現実であり合理的で、全てのメンバーによって賛成されているかの様に振る舞うのである。

Bionはこの情動状態を「依存基底的想定」、「つがい基底的想定」、「闘争／逃避基底的想定」という三つに区別している。まず「依存基底的想定」の特徴は、メンバーはグループの要求を満たしてくれるであろうリーダーに絶対的に依存し、リーダーだけが全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とする無力な存在で、何も出来ない「かの様に」行動することである。　「つがい基底的想定」は、これから新しく生まれるもの、又は未だ生まれていないリーダー（救世主）に対する希望的な期待を抱き続けることが特徴である。そしてそれは、二人のメンバーに託され、グループはこのつがいに期待をかけるのである。そして「闘争／逃避基底的想定」は、攻撃すべき或いは避けるべき敵を、内部あるいは外部につくる。そしてリーダーは、グループ外部又は内部に悪い対象が存在し、そのためにグループは自己防衛したり、又はそれらから逃げなければならないという観念を支持しなければならないのである。次に、本研究の主要な概念である「特殊作動グループ」を紹介する。

Bionは集団が作動グループになるためには、基底的想定活動を無力化することが不可欠であるという。基底的想定活動を無力化するためには、基底的想定を担当するサブグループが必要とされる。そのサブグループが居ることで、グループ内の基底的想定をある程度満たすことができ、作動グループとして活動できるものである。このようなサブグループを「特殊作動グループ」という。

以上Bionの理論に基づいて、次のような仮説を立てた。第一仮説は、特殊作動グループ機能を果たすサブグループのいるグループの方が、基底的

想定機能が低くなるであろう、第二仮説は、特殊作動グループ機能を果たすサブグループのいるグループの方が、作動グループ機能が高くなるであろう、である。

この仮説を検証するために、以下の実験方法を用いた。

Ⅱ　実験方法

実験対象者は、ランダムに抽出した本大学生122名の被験者であり、1グループ6人の計25人グループで構成し、その内14グループ（男＝8、女＝6）には特殊作動グループ機能を果たすサクラ2人を入れて実験室実験を行った。被験者に与えた課題は、本大学の案内図を作成することである。そしてオリジナルなものを作り、最終的には完成した形で提出出来る様に指示を与えた。課題終了後には、作動グループと基底的想定グループを測るための質問紙と、グループメンバーに関する質問紙の二種類を記入するよう求めた。

Ⅲ　結果と考察

まず最初に第一仮説を検証するため、質問紙における基底的想定尺度（依存、闘争、逃避、つがい）の四つの信頼性を調べるために、Cronbach alphaを求めた。その結果、依存尺度、闘争尺度、逃避尺度、つがい尺度全てにおいて、信頼性が確認された。そして、それぞれの因子分析を行い、そこで得られた因子を実験群と統制群で比較するｔ-検定を行った。

その結果、依存尺度における「他のメンバーへの依存」という因子グループのみ有意な差が得られなかったが、その他においては有意な差があった。よって、第一仮説は検証された。次に、第二仮設を検証するためにまず、作動グループ尺度の信頼性を求めた。その結果、妥当性が確認された。そして、第一仮設の時と同じ手順で分析を行った。その結果、全ての因子グループで有意な差があった。さらに、他のメンバーから見てサクラが特

殊作動グループとして機能していたかを確認する為に、グループメンバーについての質問紙を用いてｔ-検定を行った。闘争／逃避基底的想定尺度においても、依存基底的想定尺度においても有意な差があった。この結果から、特殊作動グループ機能は果たされていたと言える。

又、実験の課題であった案内図を客観的に評価してもらうために評価項目を作成し、それを4人の評価者に評価してもらい、統制群と実験群で比較した。その結果、「配置的なバランスがとれている」においては有意ではなかったが、その他の項目では有意な差があった。最後に全ての項目による全体評価をt-検定で行った結果、有意であった。以上の結果から、第二仮説も検証された。つまり、グループが作動グループとして機能できるようになるためには、特殊作動グループの存在が不可欠である、ということを証明したと言えるであろう。